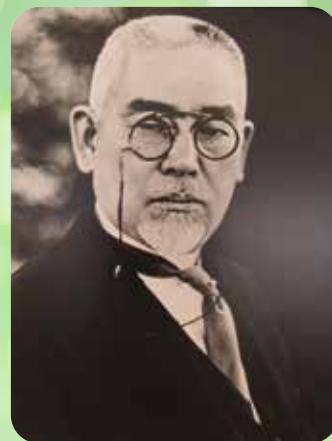


第78回

軽井沢夏期大学

受講
無料



軽井沢夏期大学は、大正7年に「学俗接近」を唱えた新渡戸稲造先生と後藤新平先生により創設された通俗大学です。戦前戦後の一時中断後、昭和24年に再開され、本年度で再開以来78回目を迎えます。

この機会に、伝統に裏打ちされた質の高い講座をお気軽にお楽しみください。

令和8年8月10日(月)、11日(火・祝)、12日(水)
軽井沢町中央公民館 大講堂

※軽井沢夏期大学は **申込不要** でご参加いただけます。

※各講座の日程等については裏面をご覧ください。

※会場では湯茶のご用意はありません。

マイボトル(水筒等)をお持ちください。

<録画配信について>

開催後、申込者限定で軽井沢町公式YouTubeにて講義の録画配信を予定しています。

(配信期間)

令和8年9月1日(火)から9月30日(水)まで

(申込方法)

いずれかの方法で申込をしてください。

1. **ながの電子申請サービスによる申込**
右記二次元コードから申込ください。

2. **メールまたはFAXによる申込**

下記事項を記載のうえ、事務局宛に申込ください。

件名: 軽井沢夏期大学録画配信申込

①氏名 ②メールアドレス ③電話番号

④居住地等(町内、県内、県外、佐久教育会)の別

(申込期間)

令和8年8月18日(火)から9月8日(火)まで



録画配信申込用
二次元コード

会場案内図



*庁舎改築周辺整備事業のため例年よりも駐車スペースが少なくなっています。公共交通機関のご利用、乗り合わせ等によりご協力をお願いします。

会場内に

『おむすび』と『豚汁』
販売あります♪

英会話ゼミナール (**申込必須** ・先着順)

【日 時】8月10日(月)、11日(火・祝)、12日(水)13時00分から15時30分まで
※3日間連続した内容となります。1日のみ等の参加はお受けできません。

【ク ラ ス】①初心・初級 ②中・上級の2クラス(各クラス 先着10名)

【申 込】いずれかの方法により、7月29日(水)までに申込ください。

1. **ながの電子申請サービスによる申込**

右記二次元コードから申込ください。

2. **メールまたはFAXによる申込**

下記事項を記載のうえ、事務局宛に申込ください。

件名: 英会話ゼミナール申込

①氏名 ②ご希望のクラス ③メールアドレス ④電話番号



英会話ゼミナール申込用
二次元コード

大学・学術・社会

日 時		講 師・演 題	講 演 内 容
8月10日(月)	9:10	開講式	
	9:30 ～ 11:50	名古屋大学名誉教授 池内 了 先生 学問・思想の自由の危機の時代に	現在の日本は、学問・思想の自由が徐々に脅かされる状況にあります。 例えば、大学では研究資金を獲得するために国家権力の介入を招く軍事研究に携わり、中高の教育の場では選挙や憲法の議論を「政治的」だとして語るのが禁じられ、特定機密保護法以下最近の国家情報局設置法に至るまで言論の自由を制限する悪法が次々に成立しています。まさに「新しい戦前」の到来と言っても過言ではありません。 学問・思想の自由は民主主義社会が成立する基本条件であり、市民が有する諸種の自由と権利が成立していなければなりません。 軍国主義化が進む現在の日本の危機的状況に対し、学問・思想の自由を遵守することを通じて、抗っていくことの重要性を強調したいと思います。
	13:00 ～ 15:30	早稲田大学教授 濱中 淳子 先生 大学教育のゆくえ ～学生はなぜ「学ばない」のか～	日本の大学生の学習時間は、国際的に見ても決して長いとは言えません。本講義ではまず、大学進学率や学生数など、日本の大学の基本的な姿を確認したうえで、文部科学省「全国学生調査」の結果から、いまの大学生がどれほど「学習していない」のかを客観的なデータで押さえます。そのうえで、約100名の学生へのインタビュー調査にもとづき、彼・彼女たちの日常や葛藤、学びへの向き合い方を描き出します。 学生は「学ばない」のか。それとも「学びたくても学べない」構造があるのか。授業で得られる知的刺激のかたちと、それを活かすために必要な時間や場、支援といった資源の問題を考えます。 さらに、教員側がなぜ教育に十分なエネルギーを割けないのかという大学教員の働き方にも目を向け、これからの大学教育のゆくえをともに考えます。高校・大学で学ぶ若者にかかわる方、大学教育の今後に関心のある方に向けた講義です。大学を社会や若者との関係のなかで日々つくり変えられている「生きた現場」として捉え直し、その現在形を一緒に考える時間にできればと思います。
8月11日(火・祝)	9:30 ～ 11:50	オックスフォード大学名誉教授 上智大学特任教授 苅谷 剛彦 先生 オックスフォードからみた ニッポンの大学 ～翻訳学問の功と罪～	日本に大学が誕生してからすでに150年以上が経ちます。他の非西欧諸国に比べ、日本の大学は急速な速さで拡大してきました。規模の面だけで言えば、戦前においてすでにヨーロッパの大学を凌駕していたといっただよいでしょう。その規模の拡大を可能にしたのは、西欧の先進的知識を日本語に翻訳して教える「翻訳学問」、「輸入学問」の急速な発達です。日本語という母語で、高度な教育を受けたり、高度な海外の学問・教養・文化に接することができたことが、日本の近代化に大きく貢献したことは間違いありません。今でも私たちは翻訳文化に助けられて海外の知識に接することができています。 しかし、その一方で、「翻訳学問」、「輸入学問」を基盤に発展したニッポンの大学には、欧米のuniversitiesとは似て非なる特徴を持つことにもつながりました。この講義では、その功罪について、私自身のオックスフォード大学での経験をふまえて議論したいと思います。
	13:00 ～ 15:30	九州大学教授 河野 銀子 先生 ジェンダーでみる日本の大学 ～学生における ジェンダー平等は可能か～	世界経済フォーラムが毎年発表しているジェンダー・ギャップ指数によると、2025年の日本のスコアは0.666（完全平等は1.0）、順位は148か国中の118位で、ジェンダー平等な国とは言い難い状況でした。この原因は政治や経済分野で女性の活躍が進まないことにあり、教育分野は問題ないと言われていますが、本当でしょうか。 確かに日本の初中等教育段階のジェンダー・ギャップはほぼ解消していますが、大学は違います。学生や教員のジェンダーバランスは、垂直方向（教育課程・教員職位）でも、水平方向（専門分野）でも不均衡が生じています。世界をみると、教員のジェンダー不均衡は比較的多くの国々に共通しているものの、学生の垂直方向の不均衡は解消している国が多いため、学生に占める男性比率が高い日本は特異に見えます。とはいえ、学生に関しても水平方向となると課題を抱えている国は少なくありません。 本講演では、まず、日本の大学のジェンダー・ギャップを国内外の現状に照らして把握します。次に、ギャップが解消した国々の初中等教育、および大学での取り組みを手掛かりとして、日本の現状の背景と今後の課題を考えたいと思います。
8月12日(水)	9:30 ～ 11:50	神戸大学名誉教授 三浦 伸夫 先生 ニュートンと当時の大学教育 ～理論と実践のあいだに～	ニュートンは今日誰もが知る英国の偉大な科学者ですが、彼がどのような環境で大学時代を過ごしたかはあまり知られていません。 本講義では、ニュートンの大学時代を通じて大学教育の歴史と制度的意義を考える契機とすることを目的とします。まず、西洋中世大学の起源、学位制度、カリキュラム、学生生活などを取り上げ、大学という制度がどのように形成され、近代初期にどのように受け継がれ、現代にどのような影響を与えているかを概観します。 次に、最新のニュートン研究の動向を紹介しながら、ニュートンが学んだケンブリッジ大学のなかで、彼がどのような教育を受け、大学改革にどのように関与したかを検討します。さらに、17～18世紀英国における大学教育の理論的役割と社会の実践的要求との関係を、とくに科学分野を中心に考察し、科学技術の中心が大学か、大学外のアカデミーかあるいは民間かという問題にも触れます。 これらを通じて、近代科学の成立と展開を大学という制度史の視点から理解することを目指します。
	13:00 ～ 15:30	慶應義塾大学名誉教授 小沼 通二 先生 湯川秀樹の戦中と戦後	日本で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹は、1907年（明治40年）に東京で生まれ、1981年（昭和56年）に京都で永眠しました。敗戦の年1945年（昭和20年）には38歳の京都大学教授でした。それまでに、27歳で初めて書いた論文が世界的に評価されて日本学士院賞や文化勲章を受賞・受章していて、日本を代表する理論物理学者になっていました。この論文で予言していた粒子が実在していることが、英国の実験によって確認されたのは1947年であり、1949年にノーベル賞を受賞したのでした。湯川は、研究論文や専門書や科学の解説以外にも多くの文章を遺しています。日記もあり、新聞に連載された自叙伝もあります。折に触れて詠んだ和歌にも思いが残されています。私の講演では、これらを読み解いた結果と26年にわたって湯川から直接聞いた多くのことを踏まえて、湯川の生涯をたどり、特に戦中から戦後にかけての激動期に、何を継続させて、何を切り替えたのかを話すことにします。